

## 日本語動詞現在時形態論（五）

マツオキヌ

吉町，義雄

<https://doi.org/10.15017/2556639>

---

出版情報：文學研究. 24, pp.129-169, 1938-12-28. 九州文學會  
バージョン：  
権利関係：





可能相「在得る」説及び第二活用全動詞現在時語尾「得る」説が元來其等で成立もする思索的考究によつては少しも動搖されずに立派に存在すると云ふ事を明示してゐる。

## 第二節 BROWN【九五—七頁】

先づ受身動詞 Hoffmann 説を一八六三年上海發行日本口語最初教科書の著者なる宣教師 Brown が採用したが、彼は其を次の様に傳へてゐる。

「受身動詞形成日本式方法は、意味によつては 受身 である動詞が自身の活用形によつては 能動 である事を繼承するが故に 奇妙 なのである(私案間隔、Z. N.)。e

「受身の得ると云ふ表現に時々役立つ要素は正格動詞、支那語得【以上二字原著通】(tokun)、得る、である。限定形 e は *eru* 又は *uru* であり、其副動詞は *eru* をして過去時は *eru* である。受身要素として其助力によつて形成される動詞は、e が附加される動詞語根によつて行爲が標記される様な「得る、獲る、又は外來起源行爲を私有する」を標記する。形式によつても、其性質によつても、是等動詞は能動であつて、其等の代りに西歐言語では受身又は相互が用いられる。其等活用は能動動詞活用の丁度其であるが故に、受身動詞派生のみを注意するのが我々に必要である」。(私案間隔、Z. N.)e

「三の派生手段がある。

一、第一級受身動詞。

變格他動詞は末尾母音語根を動詞要素。又は *yo* によつて代用する手段によつて受身動詞となる事が出来る。かくて、*jomu*、能動正格動詞、読み、から我々は *jomu*、受身正格動詞及び *jomaru*、讀める、を得るのである……」。

「第二級受身動詞。

大部分が單音節語根を有する正格動詞は語根へ受身要素を附加する。かくて「見る」なる意味を有する動詞語根 *mi* は *mie*、*mieru* 又は *miemas*、見られる、又は、自動的に、見える、に變はる……

若干の場合に動詞語根に於ては、*o* 又は *o* に移り、それから、が受身動詞語根形成に對して添加される其末尾母音の強化が起る。かくて、*kiko* (正格動詞) は *kikoe* (正格動詞) となり、其から我々は *kikoeru* 及び *kikoemas* 聞かれる、又は、自動的に、聞える、を有する……」。

「第三級受身動詞。

是等動詞は同じ複數なのである。他動詞大多數は、其等能動限定形へ日本語源原則によつて其等を合併しながら、自身の受身形を *aru*、在り、の受身形 *are* の添加によつて形成する……*n* が受身要素 *are* の前に立つ時は、*n* は *a* よりも開きの少い母音であるが故に、其は後者の前で廢滅するのであつて、*ware* の代りに我々は、例へば *jomu*—*jomaru*、*intern*—*internaru* の如く、*are* を有する……」。

「現在では *aru* の様な正格動詞の限定形 *are* は用いられないが、其は元々實在した又は用いられたと云ふ事を我々は推測するのであつて、此假説は次の動詞表に於ける限定受身形によつて確められる(私案間隔、Z. N.)。

能動限定形

受身限定形

*akku* 引く、は *arenu* を添加すれば、*nikurenu* 引かれる、となる、

*mochi* 持つ、〃 〃 *motaerenu* 持たれる、となる……<sup>③</sup>

受身相可能機能を、Hoffmann は其を直接に「在る」プラス「得る」なる意義で取られた *are* で創造される受身機能から歸結してゐるのに、Brown は *are, areru* に於ける *a-* *eru* を *a, eru* 形で取られた助動詞「能ふ」〔*mochi*〕と同一視する方法によつて説明してゐる。彼に提案された説明を Brown は次の様に解説してゐる。

「受身形成に對して用いられる要素は、*a, eru* は其に對應する支那語動詞得【以上一字原著通】(*toku*) は *may* 又は *can* を表してゐて支那語では (in Chinese)、得る又は獲る、なる意味に於けると同じく屢々此意味で用いられるが故に、爲す能力を標記する可能形成に對して何故同様な程度で適用し得るやを解するのは困難でなし」(私案間隔、N. M.)<sup>④</sup>

「何故 *are* なる助力によつて形成される受身形及び可能形が丁度同じでなければならぬか、例へば、*wareru* 又は *waraemasu* が何故時に「賣られる」、時に「賣り得る」、*kaeruru* 又は *kaeremasu* が「買はれる」、時に「買ひ得る」を意味するかを理解するのはさう容易でない。次の假説は、多分、意義差別に際する形の此同一性を説明し得る。*Aru* は、該部上示の如く、第一級受身動詞様式による、の手段によつて末尾母音 *u* の代用で形成された可能形 *aru* の様に、検討され得る。が、は「得

る」及び「獲る」なる意義と同じく屢々「能ふ」(can)なる意義を有する。かくて、例へば、*uru*、賣る、からは *uru-are* なる聯合を通じて我々は *ware* を有するのであつて、是は「賣る事が出来る」又は「賣り能ふ」を表し得るのであるが、他方から、受身形 *aru*「在り」として、*aru* を検討するならば、*ware* は「賣られる」なる意義を有するであらうし、*ware* は受身意義を有するであらう。文脈に於ける何かが是等意義中の如何なるものが此形で動詞を與へなければならぬか、と云ふ事を屢々明示する。自動語根から形成された此形に於ける全動詞は、意味によれば可能的である」(私案間隔、N. M.)。⑤

### 第三節 Astora【九七一―八頁】

受身動詞 Hofmann「在得る」説を採用するのみならず、更に進んで動詞「得る」を第二活用全動詞語尾に認めようとした次の人は Astora であつて、彼の見解は我々が既に劈頭に於て知つてゐるのである。彼は頗る決定的に *korosuru*「殺する」は明確に *korosu-aru-uru*、即ち「殺す―在り―得る」に外ならないと吐露してゐる。⑥

是と共に若干頁を通じて下に彼は書いてゐる。「動詞受身形は次の經驗規則に依つて得られる。規則。第一活用動詞及び變格動詞 *uru* 及び *inuru* には *uru* (語根 *ru*) を否定語幹へ添加せよ。第二及び第三活用動詞には、變格動詞 *kanu* 及び *suru* にも、*raruru* (語根 *ru*) を否定語幹へ添加せよ」⑦。「是等受身語尾 *uru* 及び *raruru* は、明確

に、動詞 *aru* 「在る」及び *miru* 「得る」から構成されたのである。(3)

同じ「在得る」説を彼は日本口語文法にも採用してゐて、其處では彼は書いてゐる。「受身又は可能動詞は *awaru* を能動動詞直接法現在時への添加によつて形成されるのであつて、其等に於ては末尾 *u* は省略される」。(4) 「受身動詞語尾 *awaru* は *aru* 「在る」及び *iru* 「得る」に外ならないのであり、*mirareru* 「見られる」の逐語的意義は「見—在り—得る」に外ならぬ」。(5)

#### 第四節 Chamberlain【九八—九頁】

其權威が受身相「在得る」説の擴張と採用とを或は最も助成した B. Chamberlain は次の様に書いてゐる。「日本語は受身相に對しては特殊活用を有しない。凡て所謂受身動詞は能動活用に從屬して五四—五七頁【増訂版では六三—六六頁】に與へられた活用例に從つて活用する。其等は次の規則に從つて對應能動動詞から形成される。

第一活用動詞に於ては語幹へ *awaru* を、第二活用動詞に於ては *miruru* を、第三活用動詞に於ては *irawaru* を、第四活用動詞に於ては *irawaru* を添加せよ」。(6)

「日本語受身相起源の見解は其に連結する全困難への鍵を研究者へ供給する。元來、所謂受身相は全く受身ではなく、單に假裝せる能動相なのである(私案間隔、p. 22)。例へば、*irawaru* の様な形は元々 *miru aru miru*、即ち出来るだけ逐語譯にすると、「打たれ在り得る」又は「打擊を得る」

又は「打たれ得る」であつた。此處から第二能動活用に於ける其場所が動詞 *miru*、得る、と共に生ずるのであり、自動詞は受身形を有し得ると云ふ事實が此處から生ずる」<sup>(5)</sup>

「能動形に於ける受身動詞起源へは可能相としての受身相の變更された用法も亦擧げられ得る。例へば、*miranu*、逐語的には「視る事を得る」、を取られよ。此形は當然意義陰影二箇を有するのが適當であつて、其等は其一「誰かから視る事を得る」、即ち「見られ得る」、又は其二「視る事を得る」、即ち「視る事が出来る」である。變格動詞 *suru*、爲る、の受身相 *suranu* が類似してゐる。其は元々「爲る事を得る」なる意義を有してゐて、「誰かに何かを爲る」、又は「爲る事が出来る」を意味し得る」<sup>(6)</sup>

丁度其「在得る」説を丁度其表現で B. Chamberlain は、第二及び第三活用動詞受身・可能相形成に對して「快音的、」の採用を求めると云ふ差異のみを以て、日本口語教科書に於ても解説してゐる。

彼は書いてゐる。「正に *mireru* も亦語幹 *i*、快音的、及び *mireru*、即ち「射在り得る」、「射る事を得る」、「射られ得る」(なる意義を有する)、から成立する」<sup>(7)</sup>

此外に、彼は受身相形成の機械的規則を與へてゐるが、特に、「第一活用動詞に於ては否定語幹へ *-eru* を、第二及び第三活用動詞に於ては *-aranu* を添加せよ」<sup>(8)</sup>

可能機能を口語文法に於て彼は次の様に説明してゐる。「受身意義は屢々可能意義に移る……現代日本口語の此特質には、或他のものと同様、支那語助動詞得【以上一字原著通】(日本語では *eru* と傳へられる)が「得る」(*get*)及び「能ふ」(*can*)なる二意義を有するが故に、支那の影響を精査し得る様に思はれる」<sup>(9)</sup>

第五節 Weitz, Mac-Govern 及び Sanson【九九—一〇一頁】

H. Weitz は殆ど逐語的に B. Chamberlain を繰返してゐる。「能動相を受身相への變更は *renu* を第一活用否定語幹へ *mareru* を第二活用同上語幹への添加に依つて派生される」。(2) 「併し、嚴密に言ふと、日本語には受身相は無いのであつて、所謂受身語尾は *aru*、得る、と合一せる短縮形 *aru*、在り、を表示するのであつて、例へば *shimaru* の逐語的意義は「知り在り得る」であり、類似して *mirareru* は語幹 *miru*、快音的、及び *ari aru*、即ち「見在り得る」なのである」(私家間隔、N. M.)。(3)

同じ「在得る」説が一九二〇年發行日本口語教科書著者 Mac-Govern によつても採用された。彼曰く「日本語受身相は幾分錯雜してゐて、英語では對應的に叙述出來ない。子音動詞第一語幹へ添加される *aru* は *ar(u)*、在り、及び *aru*、得る、から形成される。「得取」なる觀念は徹頭徹尾保持されるのである」(私家間隔、N. M.)。(2) 「接尾辭分析」の節に於て彼は受身相形成の所謂周知の實用(元來、日本式機械的)手段をも亦與へてゐる。(3)

D. Sanson は彼に採用された受身・可能相形成實用手段と竝んで、「在得る」説をも亦墨守してゐる。此説が彼の解説に於て如何なる體裁を採用してゐるかは、次の引用句によつて判斷し得る。彼は書いてゐる。「*aru* に終る形は *aru* に終る形よりも稀であると云ふ事は充分な證據が無いし、彼此形起源の如何なる確定論證も無いのである。が其

等兩者は *aru*、「在る」、及び *uru*、「得る」の二助動詞聯合痕跡であると云ふ事には少しの疑があり得る。如何なる他の推測も、其等の次の探究から解る如く、被檢討動詞形の様々の用法をさう充分には説明しない。(24)

「我々が、例へば *sinuru* 等の如き形が假設的聯合

*sin(u)* — *ar(u)* — *uru* (又は *sin-ar-uru*)

死ぬ 在る 得る

から弛緩に依つて形成されたと推測するならば、其等意義の全範圍は容易に理解される。(25)

「受身形の擴張された、又は多分より精密には、竝行せる機能は、行爲完成能力を表現する事に存する。かくて、或文脈に於て (私案間隔、Z. 1.)

*yukuruu* 行かるる

*taberuruu* 食へらる

*miruruu* 視らるる。

是は一見奇妙に思はれるが、語尾は動詞 *uru* (得る) を保持すると云ふ事、そして此語は英語に於ける助動詞「能ふ」(*can*) と丁度同様に用いられると云ふ事を想起するならば、理解するに困難でない。古典的現代日本語に於ては、多くの方言が

*jomeru* の代りに *jomi-eru*

*ikeru* // *iki-eru*

*kikoeru* // *kiki-eru*

なる形を維持してゐるのに、

*e-iwadsu* 得言はず

*miru yo edasu* 見るを得ず

の様な表現が存するのである。

此外、*ari nru* (N)「在り得る」*ari eru* (N)「在り得む」の類に於ける形は奈良朝原文に於て偶然遭遇する」。

「故此に、「受身」形は其可能意義を動詞 *nru* から得るのであつて、多分、*i-nru* に終る全形でなくとも、或物は此一動詞のみを保有してゐて動詞 *aru* を保有しないと云ふ事には到底何の疑もあり得ない」。

### 第六節 Lange 及 Plant 【一〇二—一二頁】

獨逸の日本學者 P. Lange 教授は受身・可能及び元來可能相を可能形と呼んでゐる。彼曰く「行爲の可能性は可能形を通じて表現され得る。其等が形成されるのは、

(一) 第一 活用動詞からは、語幹へ附加される *raeru* を通じて……

(二) 第二 活用動詞からは、語幹へ *aru*、*iru*、*uru* の添加を通じて。前者の場合には語幹は、否定及び使役形に際しての様に、*u* に移り、後者の場合には、*u* に移る……

語尾 *arenu* に於ては動詞 *aru* 及び *eru* が保有される。第二活用動詞短縮使役形に於ても動詞 *aru* を認知するのは正に亦容易である」。(3)

「前章に於て述べた *arenu* (第一活) 及び *eru* (第二活) に終る可能形は 受身 意義に於ても用いられるが、國語に於ては殆ど主體が活ける實體である時にのみである」。(2)

他の獨逸日本語學者 H. Platt 教授は受身・可能相形成を次の様に解説してゐる。「受身相は語尾 *aru* を、語尾 *aru* が豫め省略された後で、第一種動詞現在時へ、及び第二種動詞單一(子音)語幹への添加によつて形成される。

かくて、第一種 *taberu taber taber-aru*

*miru mir mir-aru*

第二種 *kaku kak kak-aru*

*mac' mad mad-aru*

變格であるのは *kuru kor-aru*

*suru ser-aru*」(3)

「語尾 *aru* は *aru* 「在る」の單一語幹 *ar* 及び動詞 *aru* 「得る」から形成されたのである」。(31)

「日本語では「能ふ」(*can*)、「出来る」(*be able*)及び「許可を以て能ふ」(*may*)なる觀念を表現する語はないのである。英語ではかく屢々用いられる是等語の缺乏は様々の方策もて補充される。

一、此場合には可能と呼ばれる受身相もて……かくて受身・可能相は常に受身可能性を表現する」。(32)

「特殊可能相もて。第二種動詞は *eru* (獲得する) を單一 (子音) 語幹への附加によつて形成する。かくて、*kaku*—*kakernu*, *dasu*—*dasernu*, *macu*—*macernu*……等」<sup>(33)</sup>

### 第七節 Couplant 及び Palet 【一〇二—一三頁】

佛蘭西日本學者も亦此一般通用「在得る」説を墨守してゐる。M. Couplant は受身・可能相形成に關して曰く。「此相は *erenu* を動詞語根へ添加して形成される。此語根が子音に終る第一活用に於ては、添加は全く自然に爲される。第二活用に於ては、或は同上動詞の形動詞に於て存する、への模倣に依つて、或は同上語尾に於ける二、の引力に依つて、語根と語尾の間へ文字、を挿入する。

例證、*kibu* 聞く、可能、*kikaweru* (語根 *kik*)

*inu* 射る、可能、*inaweru* (語根 *in*)。

是等形は *kiki awi eru*, *i awi eru* 即ち「聞き在り能ふ又は得る」「弓から射在り能ふ又は得る」に對應する。此處から、「聞き能ふ」「射能ふ」、亦「聞く、射る事實を得る」も、なる意義が出て來るのである」<sup>(34)</sup>

*Balet* は *erenu* 及び *rarerenu* を附加して受身・可能相形成の所謂實用手段を採用してゐるが、次の様に言つてゐる。

「實際に膠着を説明し得るが爲には、語根へ *erenu* (*eru-erenu*) が附加されるのであると言ふ必要がある。au, in, ou, nu に終る動詞は、其等の語根も亦、強氣音を有する *u* の如く發音して、*e* を以て寫音されなければならなかつたで

あらゆる子音に終るが故に、例外を構成しなす。』<sup>(3)</sup>

第二活用 (Chamberlain によれば第三) 動詞受身・可能相形成に關連して彼は次の註釋をしてゐる。「是等動詞は助動詞 *iru* 及び語根の膠着の結果でなければならぬ。接尾辭 *eru* 及び *arenu* は、例へば、*ab-ir-eru*, *k-ir-arenu* 等の第一膠着に依つて得られる二重語根に附加される」。』<sup>(3)</sup>

類似註釋を彼は第三活用 (Chamberlain によれば第二) 動詞に關しても爲してゐる。彼曰く。「*arenu* は、例へば、*tom-er-arenu* 等、本源的語根 *eru* の膠着によつて形成される二重語根へ添加される」。』<sup>(3)</sup>

## 第八節 Smirnov, Spal'vin 及び Pozdnev 【一〇三一—四頁】

さて露西亞の日本語學者達へ轉すると、我々は彼等も亦一般通用受身・可能相説を分有してゐる事が解る。

D. Smirnov は曰く。「全活用動詞受身相は直接法現在時語尾 *u* を *arenu* に變更して形成される……一般に、規則として次を理解し得る。受身相は第一活用動詞否定語幹へ語尾 *renu* を、「第二及び第三、變格 *kuru* 及び *suru* も算入して、へは *wareru* を添加して形成される」。』<sup>(3)</sup>

E. G. Spal'vin 教授は、J. Hoffmann, B. Chamberlain 及び其他に類似して、日本語に於ける受身相存在を否定して其故に其を 可能 と呼んでゐるが、次の様に吐露してゐる。「日本口語文法から我々に既に知られてゐる様に、可能相の補足には動詞 *aru* 在る、及び *iru* 又は *uru* 得る、が關與する。此相派生が否定語幹への關係は

*uru* 又は *ururu* の補足の體裁の下に便宜契機を用するのみであつて、實際に派生の兩場合には不定形に進む *uru = aru + uru* (又は口語では *eru*) なる補足が取扱はれる。かくて *osuruu = osi + aruru*, *uketuruu = uke + r + aru + uru*。不定形及び補足 *uruu* 間の派生の最後例證に於ては二母音合流を避ける爲に全派生に對して特徴的な、が挿入されたのである。(2)

「被類別補足に於ける動詞 *uru* 及び *uru* の現存は被類別派生形理解への根本的な鍵を我々に與へる。後者に於ては三動詞が關與するのであつて、即ち所與の場合には能動相不定形で活用される動詞、それから現存指示に對する動詞 *uru*——在る、換言すれば、先行動詞に指示される行爲の終了、そして最後に、論題の存する行爲の遂行を如何なる觀點から理解しなければならぬかを指示するに對する動詞 *uru* 又は *uru*——可能性を得る、可能性を有す、能ふ、權利を有す」。(3)

「受身」相なる稱呼が何故彼によつて「可能」相なる稱呼に代用されるかを説明して、E. G. Spal'vina 教授は書いてゐる。「行爲完成の可能性が或人に歸される時、他人へは完成の同じ動作が歸され、可能性の所與の理解は受身へ移り、或人が他人側からの行爲完成を蒙ると云ふ理解へ甚だ近いのであつて、或人が他人側からの反動を蒙る様な可能性が得られるのである。全力は特に、動詞 *uru* に於て「得る、權利を有す、能ふ」なる意義が置違へられた事に存する。

前述は我々が、其を「可能」なる稱呼で代用して、「受身」相なる稱呼を避けようとする理由に役立つのである。(4)  
D. Pozdneev 教授は受身・可能相派生の實用的(元來、日本式機械的)手段をも「在得る」説をも採用してゐる。

宗は書いてゐる。「受身相語尾を分析して、我々は *renu* (*ruru*) 及び *rueru* (*raruru*) が能動及び中相、特に a) *aru*、在る、及び b) *iru* 又は *iru*、得る、形成に關與する同じ動詞から成立すると云ふ事を容易に理解し得る。互に膠着する是等兩動詞は、動詞否定語幹へ補足される」。(42)

### 第九節 歐文法による Hoffmann 受身相「在得る」説採用と其等による其形成手段採用

【一〇四—一六頁】

此短要覽は、一方からは、日本語現代歐文法では根本に於て、初めて Hoffmann に提案された受身・可能相「在得る」説が、實際に、採用された事を明示するが、他方からは、一般に著者達が受身・可能相形成手段自身への箇々見解に於ける著しき雑色と異説とを顯すのである。

概して上名全文法著者達は彼等に採用された此相形成手段觀點から次の群に分裂する。

(一) Brown は Hoffmann と同く受身・可能相派生手段を墨守するのであつて、即ち、彼は從屬形式附屬物を口語現在時へ附加してゐて日本式機械的手段を求めてゐない。Aston は文語文法に於ても亦、少くとも、例へば、*korosuru* が *korosu+ari+uru* から形成されると見做してゐる限り、現在時への派生を墨守してゐるが、事實は日本式機械的手段を採用してゐるのである。

(二) Aston は口語文法に於て、Plaut 及び Smirnov は Hoffmann 式手段を幾分變形させてゐる。彼等は相形式附

屬物(又はより正しくは、かゝるものと普通誤認されるもの)を現在時自身へでなく、語尾の附加によつて現時口語形を形成する 丁度 其語幹へ附加してゐる。Smirnovも亦日本式機械的手段を採用してゐるが、Aston及びPlantは是を抑制してゐる。

(三) Chamberlainは文語文法に於て、實際に受身・可能相は非受身動詞 不定形へ *arishuru* を附加して形成されると見做して、第一活用に於ては *aruru*、第二に於ては *arawuru*、第三に於ては *irawuru* を 單一(閉)語幹へ補足して、そして第四に於ては 單一(開)語幹へ *irawuru* を補足して受身・可能相を形成する。日本式機械的手段を最初の三活用に對しては彼は採用しないのである。

(四) Baletは、元來、受身・可能相は 單一(閉)語幹へ、第一活用に於ては *aruru*、第二に於ては *irawuru* として第三に於ては *erawuru* を附加して形成されると見做して、日本式機械的手段を墨守してゐる。

(五) Chamberlainは口語文法に於て、Weitz及びSpal'vinは、實際に受身・可能相は動詞「在る」及び「得る」(文語では *arishuru* 又は口語では *arishuru*)を所與非受身動詞 不定形へ附加して形成されると斷言して、日本式機械的手段を採用してゐるが、其際「在得る」説との一致に際しては第二、第三及び第四活用動詞 不定形と *arishuru* 又は *arishuru* 間に 快音的、を挿入する。

(六) Courantは 單一(閉)語幹へ *aruru* を補足して第一活用の、同じ *aruru* を 不定形へ補足して殘餘活用の動詞受身・可能相を形成してゐるが、其際此派生手段を「在得る」説と一致さす爲に、其と *aruru* との間にも亦子音音聲質、を挿入する。が彼は *arishuru* を 不定形へ同様に附加して全活用動詞受身・可能相が理論

的に形成されると見做すのである。

(七) *Mac-Govern, Spal'vin, Lange* 及び *Plant* は、上名全著者達と同様に、「在得る」説擁護者であるが、「理論」と「實用」との何等一致をも考究せず、日本式機械的手段を墨守してゐる。

我々が解る如く、日本語歐文法は一でなく、若干の受身・可能相形成手段を提案してゐるのである。*Hoffmann* 及び *Brown* は其を 現在時 口語形へ *aren* を附加し、*Aston, Plant* 及び *Smirnov* は 現在時 口語形語幹（即ち、活用に依つて、單一又は派生の）へ同じ *aren* を附加し、*Chamberlain* は文語文法に於て 單一語幹へ附加して、*Chamberlain* は口語文法に於て、*Weintz* 及び *Spal'vin* は日本式機械的手段を採用して、實際に受身・可能相は不定形へ *ari+eru* 又は *ari+uru* を附加して形成されると見做してゐるのである。

此雑色繪畫は疑も無く、受身・可能相形成は日本語歐文法へ頗る多くの困難を供給してゐると云ふ事に就て語つてゐる。提案される其形成手段の多様性は、其等は凡て、最も多分、形態的には根源的でなく、其故に推測的であり派生的であると見做す充分な根據を興るのである。此多様性は、「在得る」説自身も強固な形態基礎を自身下に有しないのであつて、受身・可能相形成の提案される手段中の一にも形態根源を興へる事が出来ないと云ふ事を表してゐる。

第十節 Hoffmann, Brown, Aston, Plant 及び Smirnov 手段に就ての批判的註解【一〇六頁】

受身・可能相形態論に就て上述された全部の後では、Hoffmann 及び Brown をして特に Aston, Plant 及び Smirnov が最も近く眞理に至つたと云ふ事が解るのは困難でない。さうでないもの、特に現在時語尾 *-ing*、不定形語尾 *-ing* 及び古風反復接尾辭 *-ing* が受身相接尾辭と誤認されると云ふ事に、そして實際に是等形態質が受身相接尾辭である形態質と共に合一されると云ふ事に存する「在得る」説の全擁護者達に共通な誤謬を打捨てるならば、Hoffmann 及び其踏襲者 Brown の誤謬は、受身相接尾辭を直接に現在時口語形へ、其語幹へでなく、單一（第一活用）又は派生（殘餘活用）活用に依つて、附加すると云ふ事に存する。

Aston, Smirnov 及び Plant は此誤謬を爲さないで、其接尾辭を現在時口語形語幹（即ち、第一活用動詞に於ては單一そして其他活用動詞に於ては派生の）へ附加して全然正當に受身相を形成する。

第十一節 其文語文法に採用された Chamberlain 手段に就ての批判的註解【一〇六—七頁】

正に亦 Chamberlain は文語文法に於て Cowant は口語文法に於て正當に第一活用動詞受身相を形成してゐるが、何とならば從屬接尾辭（單一接尾辭 *-an-*、複合 *-aver-* 及び *-ariv-*、が二重接尾辭でない）を彼等は 單一 語幹へ

附加してゐるからである。Palet は、第一活用動詞受身相形成に理論的説明を與へて、其は對應接尾辭を彼が 單一語幹 と解する 語根 への附加によつて形成されると云ふ事を正當に註解してゐる。

其に對して、語幹 (單一) へ *eruru* 及び *waruru* を附加して第二及び第三活用動詞受身相を形成す可く忠告して、Chamberlain は此形態質 合成物 に先行する派生語幹 *er-* 及び *war-* の接尾辭、受身相へ何等の關係をも有しない、を *aruru* (へ *aruru*) と合一する誤謬を完成してゐる。併し、如何に Chamberlain が是等接尾辭を視たかは、第二及び第三活用に對して彼に提案された手段の何等説明もない故に我々には知られてゐないのである。

### 第十一節 Palet の説明と其誤謬【一〇七頁】

が是は彼の代りに、接尾辭 *-ru-* は動詞 *eru*、得る、*-iru-* は動詞 (2) *iru*、居る、であると見做す Palet が爲してゐるのである。此同一視は、明確な如く、是等派生語幹接尾辭が既名動詞との單一同音に基いてゐるのであつて、受身・可能相「在得る」説を彼に採用された其派生日本式機械的手段と一致させる爲にのみ爲される。Palet の意見によると、*aruru* は 語根 へ附加され、語根 は彼にあつては 單一語幹 であるが故に、單一語幹 と *aruru* 間に或形式附屬物を挿入しないなら、第二及び第三活用動詞受身・可能相形成は *aruru* を 語根 又は 單一語幹 への補足によつては、日本式手段によつて得られる實在相形を實際に與へない。

實際、例へば動詞 *abiru* 及び *tomeru* の受身相現在時口語形は、日本式機械的手段によれば  $\langle abiru + raneru \rangle$  及び  $\langle tome + raneru \rangle$  から得られる *abirareru* 及び *tomerareru* であらう。不定形 *abi* 及び *tome* の語根 又は 單一語幹 は對應的に *ab-* 及び *tom-* である。我々が *areru* を 此 單一語幹へ直接附加しようとするならば、我々は實在形 *abirareru* 及び *tomarareru* に對應しない形 \**abareru* 及び \**tomareru* を得るのである。或場合には *-a-*、他の場合には *-er-* では足りない。此故に、Balec が爲しめる様に、其等は 助動詞 (*a*)*iru* 及び *eru* に外ならないと明言して、其等を 語根 又は 單一語幹 へ追加するだけの事なのである。實際の所、我々が知つてゐる様に、形態質 *ab-* 及び *-a-* は、從屬形態質を附加する事によつて受身・可能相の其々の形が形成される 派生語幹接尾辭 なのである。

第十三節 其口語文法に於て提案された Chamberlain 手段の誤謬、其本質及び蓋然的説明

【一〇七一—八頁】

日本口語文法で受身・可能相形成問題に於て爲された Chamberlain 及び彼の見解を覆守する Weiniz 及び Spal'rin 教授の基本誤謬は、彼等が所謂 不定形  $\langle ari + eru \rangle$  又は *ari + eru* を補足して受身・可能相を形成する事に存する。此誤謬は、第二、第三及び第四活用動詞に於て 不定形 と *ari + eru* (*ari + eru*) 間で、彼等が實在する受身・可能相形を 不定形  $+ ari + eru$  (*ari + eru*) から得んが爲に認容す可く餘儀なくされた「快音的、」が生

すると云ふ第二の誤謬的斷言を伴ふのである。

不定形から受身・可能相形成の此手段の本質は、一目瞭然に異なる著者達に提案された此相形成手段の次の比較表が明示する。

Hoffmann 式手段 (Hoffmann, Brown)	變形 Hoffmann 式手段 (Aston, Plaut, Smimov)	不定形よりの形成手段 (Chamberlain, Weitz, Spalvin)
<i>xibu + arenu</i> > <i>xikarernu</i>	<i>xibe + arenu</i> > <i>xikarernu</i>	<i>xibi + arenu</i> > <i>xibe + arenu</i>
<i>akernu + arenu</i> > <i>akerarernu</i>	<i>aker + arenu</i> > <i>akerarernu</i>	<i>ake + arenu</i> > <i>ake + r + arenu</i>
<i>ocirnu + arenu</i> > <i>ocirarernu</i>	<i>ocir + arenu</i> > <i>ocirarernu</i>	<i>oci + arenu</i> > <i>oci + r + arenu</i>
<i>mirnu + arenu</i> > <i>mirarernu</i>	<i>mir + arenu</i> > <i>mirarernu</i>	<i>mi + arenu</i> > <i>mi + r + arenu</i>

詰り、不定形からの受身・可能相形成擁護者達は、Aston, Plaut 及び Smimov よりも複雑な手段を提案してゐるのである。何故より複雑な此手段を墨守せねばならぬか、何故 *arenu* (< *ari + ernu*) 又は *aruru* (< *ari + uru*) を不定形へ附加して受身・可能相を形成せねばならぬか、是は此觀點の擁護者達は少しも辯明してゐない。

日本語では或動詞を不定形の他のものへの附加によつて形成される(例へば、*kuki-nd(x)osu*, *mo:siageru*, *juki-cigad(x)u*等)複合動詞の類として受身動詞が検討される(Hoffmann 觀點)事によつて此見解が説明されると云ふのは在り得る。

第一活用動詞 不定形へ *arenu* (*aruru*) を附加して、彼等は特別困難に遭遇しないのであつて、何とならば

古代に於ける様に現代日本語に於ても 複合母音に於ける母音合流に際しては、例へば、*jukid(a)u, maci-a(f)u, tori-awuka(f)u*等の母音中の一の如何なる弛緩も起らないのが最も屢々であると云ふ、そして例へば、*maci+ageru*、*molageru*の様な複合第一部末尾母音弛緩の場合には頗る稀であると云ふ事情を記さない譯には行かぬけれども、日本語では二母音合流に際しては、複合第二部語頭母音脱出と同様、複合語第一部末尾母音脱出が起るからなのである。

兎に角、不定形末尾母音は、受身・可能相が實際に *awu (awuu 等)* を非受身動詞不定形への附加によつて形成されたのであつても、*awu (awuu 等)* に於ける語頭母音との合流に際しては脱落するかも知れないと云ふ事は理論的に認容されるのである。

#### 第十四節 Chamberlain 手段の矛盾そして其等が解決される次第【一〇九頁】

が若し、Chamberlain (口語文法に於て) 及び其踏襲者達が斷言する様に、受身・可能相が實際不定形から形成されるなら、*awu (awuu 等)* に於ける語頭母音遭遇に際して不定形末尾母音弛緩は何故第一活用動詞に於てのみ生じて全殘餘活用動詞に生ぜず何故其他活用動詞に於て末尾母音弛緩の代りに快音的、が生ずるかと云ふ問題が生ずる。何故丁度反對が起らぬか、即ち、何故快音、は第一活用に於ける母音合流に際して生ぜず、不定形母音弛緩は第二、

第三及び第四活用に於ける母音合流に際して起らぬのであるか。

又は、若し凡て是等問題を具體的に説明するならば、何故、例へば、第一活用動詞 *wanuu* の不定形、*wanui* プラス *aruu* は *wanuaruu* を興へるかとして何故第三活用動詞 *wanuu* の不定形と同じ *wanui* プラス *aruu* は、受身・可能相派生の Chamberlain 説が是を斷言する如く、*wanuiaruu* を興へるか、そして何故反對現象が起らないのであるか。若し、實際に、母音合流同一現象が起るなら、何故或場合には（第一活用動詞に於ては）母音弛緩が起るが、他の場合には（第二、第三及び第四活用動詞に於ては）快音的、が形成されるのであるか。

受身・可能相が從屬接尾辭 *-ari*、*-aru*、*-uru* の不定形へでなく、單一（第一活用動詞に於ては）又は其爲に如何なる母音合流も決して起らない常に閉である派生語幹（第二、第三及び第四活用動詞に於ては）への附加によつて形成されると云ふ單一理由によつて、日本音聲學が是等問題凡てに解答を興へ、従つて是等矛盾を凡て解決する事は出來まい。

上説の此相形態論は、第一活用で採られた動詞 *wanuu* の受身・可能相は何故 *wanuaruu*（現在時文語不定形）、*wanuarui*（現在時口語形）等となるかそして第三活用で採られた同じ動詞 *wanuu* は *wanuiaruu*（現在時文語不定形）、*wanuiaruui*（現在時口語形）等となるかそして何故反對にはならぬかと云ふ満足に行く説明を充分與へる。第一の場合に於ては受身・可能相は單一語幹 *wanui* への從屬形態質の附加によつて、第二の場合には單一へでなく、同じ單一語幹 *wanui* + 古風反復接尾辭 *-i* から成立する派生語幹 *wanui-i* への附

加によつて形成される。

第十五節 Chamberlain 手段誤謬本質と快音的、説起源【一〇頁】

是は不定形からの受身・可能相形成の擁護者達が、第二、第三及び第四活用動詞派生語幹接尾辭へ從屬するとして日本式機械的手段によつて其形成に際する是等活用動詞受身・可能相接尾辭と普通誤認される形態質合成物 *-aru, -aruru, -are, -areru* の語頭に存する子音を快音的、と誤認してゐると云ふ事を意味する。快音的、の此説は凡て全然是等機械的補足 *-aru, -aruru, -are, -areru* によつて暗示されるのである。

受身・可能相實在形を彼等は、第二、第三及び第四活用動詞に於ては不定形から少しも區別されない所謂否定語幹へ *-aru, -aruru, -are, -areru* を補足して、日本式機械的手段によつて發見するが故に、そして是等 *-aru, -aruru, -aru, -aruru* に於ては動詞「在る」及び「得る」形の複合として、彼等に檢討される形態質合成物 *-aru, -aruru, -are, -areru* との比較に際して是等 *-aru, -aruru, -are, -areru* に於ては受身・可能相接尾辭と誤認もされ、其等手段による受身・可能相形の得取に對しては其に充分でない過剰子音、が生ずるが故に、彼等は其を快音的と明言もするのである。

第十六節 Couvant 手段に就ての批判的註解【一一〇—一頁】

理論的に受身・可能相が全活用動詞 不定形へ *aren* の附加によつて形成されると見做す Couvant が此子音音聲質、へ與へてゐる説明も、殆ど同じ註解を招いてゐる。彼の推測によれば、第二活用動詞 (Chamberlain の第二及び第三活用に對應する) に於ては此音聲質、は或は 不定形と此活用動詞現在時口語形に於て存する末尾、への模倣に於ける *aren* との間へ挿入されるか、又は *aren* に於て存する二、の影響下で現れるのである。若しも「模倣に於ける」なる表現を「様式によつて」として解釋するならば、是は彼が此音聲質、を、上に於て制定された様に、Chamberlain による第二及び第三活用動詞派生語幹接尾辭へ從屬する、と解する用意があつたと云ふ事を表するのであらう。彼が其等と同一と見做す傾向があつた限り、彼は甚だ眞理に近いのである。此、は 引 力 によつて生ずると云ふ推測こそは、其中で此 快 音 説 が錯雜する音聲非相似性へ至らしめるのであるが、其故に其に關する上述全部は當然後者觀點へも應用されるのである。

第十七節 日本式機械的手段の誤謬【一一一頁】

前述凡ての後では、Mac-Govern, Sansom, Lange, Pozdnev 及び他の上名著者達が墨守する受身・可能相形成日本

式機械的手段の誤謬も亦何に存するかは、明白である。

日本文法によつて此相 接尾辭 と誤認され第一活用動詞語幹の所謂 否定語幹へ補足される 形態 質合成物 *-ru, -runu, -re, -renu* に於ては、受身・可能相接尾辭 *-si* に屬する 母音音聲質 *o* が 足りないものであつて、現在時及び不定形語尾である 過剩形態質 *o* 及び *u* が 存するのである。

亦同じ相の 接尾辭 と誤認もされ、第二、第三及び第四活用動詞の所謂 否定語幹(所與の場合に於ては 不定形と同一なる)へ附加される 形態質合成物 *-aru, -aruru, -are, -aruru* に於ては、派生語幹 接尾辭、第二活用動詞に於ては *o*、第三活用動詞に於ては *u*、第四活用動詞に於ては *o* に屬する是等形態質合成物語頭に於て來る 過剩子音 *u* が 存するが、現在時及び不定形語尾である同じ 過剩形態質 *o* 及び *u* も亦存する。

かくて、或場合には受身・可能相 接尾辭 *si* から其母音 *o* が除かれて動詞語幹へ附加され、他の場合には動詞 派生語幹から其末尾子音 *u* が除かれ、相接尾辭へ附加される。そして、此外に、兩方の場合に於て相の 單一及び複合 接尾辭へ、派生語幹に關して切斷されたる又は豊富にされたる姿に於て、現在時又は不定形の語尾が附加される。

換言すれば、兩方の場合に於て、日本字母の音節的特徴の爲に全然不可避的な形式附屬物の技工的過度分解が派生する。是に、元來、受身・可能相形成の日本式機械的手段及び其を採用する凡ての誤謬が歸しするのである。

第十八節 其に依つて恰も *aruru* が形成される動詞「在る」*aru* 及び「得る」*uru* の合

一手段の雑色【一一—二頁】

今我々が凡て上名著者達が動詞「在る」*aru* 及び「得る」*uru*, *aru* の合一手段、其に由つて、彼等の意見によれば、*aruru*, *aruru* 等が形成される、を如何に視てゐるかを認知するに興味を持つならば、此處に於ても一般通用見解は無<sub>S</sub>のであると云ふ事が解る。Aston, Chamberlain, Weintz, Courant 及び Spalvin は *aruru*, *aruru* は動詞「在る」の不定形への附加に依つて、即ち  $\langle aru + uru, aru + eru \rangle$  から、形成されると見做すのである。Mac-Govern, Ballet 及び Pozdneev は、*aruru* は *aru* と *eru* の合一から、即ち  $\langle aru + eru \rangle$  から形成されると考へてゐる。Sansom は、 $\langle aru + uru \rangle$  からと同様、 $\langle aru + uru \rangle$  からの形成をも認容してゐる。只 Plant のみが *aruru* を  $\langle aru + eru \rangle$  から歸結してゐるのである。

此見解雑色は、*aruru*, *aruru* は動詞「在る」及び「得る」からと推測された形成が確固たる形態根源を有せざる事、そして、元來、既名著者達は、*aruru*, *aruru* は、他にもない、此様にして形成されと斷言する時には、占術に従事してゐるのであると云ふ事を證する。

果して *aruru*, *aruru* が、動詞「在る」及び「得る」から形成された複合動詞を表示するならば、形態觀點からは  $\langle aru + uru, aru + eru \rangle$  からの其等形成の可能性は、たとへ複合動詞に於て第一部は常に不定形で與へられ

たからとは云へ除外されなければなるまい。此形態觀點からは *aruru*, *aru* が  $\langle aru + ru$ ,  $aru + ru$  からなる形成は既にもつと蓋然的なのである。同じ觀點から *aru* は  $\langle ar + ru$  からと歸結する Plant の派生も亦、複合動詞 類似型が日本語には存しない故に、無根據なのである。

結局、*aruru* 及び *aru* なる派生の此雑色は凡て、上名著者達は其等を、實際には 形態合成物であるのに、複合動詞と認める事によつて特に説明されるのであり、其爲に其等を形態的に複合動詞として創始するのは不可能であると云ふ事は驚く可きでない。

### 第十九節 受身・可能相の可能機能起源の様々の説明【一一一—三頁】

見解の同じ雑色は受身・可能相の可能機能の説明に於ても顯される。

Hoffmann は、此相の可能機能は其受身機能から出て來ると見做してゐる(上記六四頁参照)。其觀點を、「受身・可能相は常に受身可能性を表現する」(私案間隔、Z. N.)と考へてゐる Plant が墨守してゐるのである。

Chamberlain は文語文法に於て、可能機能は、其に依つて受身相が形成される能動動詞「得る」*uru*によつて創造されると云ふ意見を保つてゐる。

Brown は受身相形成に關與する動詞 *uru* は、彼の意見によれば、「得る」なる意義の外に、「能ふ」なる意義をも

有すると云ふ事によつて 可能 機能を説明してゐる。即ち 可能 機能を *erh-* 「能ふ」から歸結してゐるのであるが、其際、*erh-* の意義の思索は、結局、受身・可能動詞は所與文に於て如何なる機能で用いられたかと云ふ問題を解決する事が出来ないといふ恰も感ずるかの様に、彼は受身及び可能機能は 文脈 によつて屢々認知されると云ふ甚だ特徴的豫告を與へてゐる（上記九七頁参照）。此豫告は、實は受身と同じく、可能機能も受身・可能相に於ける動詞と文の其他部分との間で制定された 文法 連結 により決定されると云ふ事を意味するのであつて、かくて、Hoffmann に提案された受身動詞「在得る」説と同じく、「能ふ」なる意義に於ける *erh-* から可能機能を歸結する丁度 Brown 説をも無にするのである。

Chamberlain は口語文法に於て、可能 機能を「能ふ」なる意義に於ける *erh-* から歸結する Brown 觀點に傾いてゐるが、全然無根據に是を支那の影響と視ようとしてゐる。Sansom と Courant は、可能 機能を *erh-* 「能ふ」から歸結してゐる故、全然 Brown 觀點を墨守するのであるが、此際 Sansom は、Brown に類似して、文脈の助力を求めてゐるのであつて、何とならば彼に於ては受身・可能動詞は 或 文脈 では 可能 意義を有するからである。

E. G. Spallvin 教授は、可能 機能は 受身 機能によつて創造されるのでなく、却て 受身 機能が 可能 から出て來るのだと考へてゐられる。可能 機能なるものは、「得る、權利を有す、能ふ」なる意義を有する動詞 *erh-* が相形成に關與する事によつて創造される。成程、E. G. Spallvin 教授は、可能 機能に於て採られた動詞 構成 は 受身 機能で採られた動詞構成とは 異なる と記してゐられるが、<sup>(4)</sup> 生憎に

も、眼目は動詞 *win* 「得る、出来る」にあると確信されてゐて、當然の注意を此事情へは分與されてゐない。

第二十節 可能機能の批判的註解と蓋然的形成【一一三—一八頁】

是等正反對的見解は、私の意見によれば、Hoffmann 受身相「在得る」説非成立性の輝かしい圖解なのである。彼等に於ては其高尚なる「哲學的」起源が極めて顯著に感ぜられる。生憎にも、此説は現在殆ど神學的特徴ある獨斷に變つたが故に、歐文法は、言語事實を客觀的に探究する代りに、其疑惑を少しも蒙らずに、其註解と解釋とに屢々従事してゐるのである。

かくて、或著者達にあつては受身・可能相の可能機能は其受身機能の展開を示すのであるが、他の著者達にあつては「得る」の意義に於ける動詞 *win* もて、第三にあつては「能ふ」の意義に於ける動詞 *win* もて、第四にあつては「得る」及び「能ふ」の意義に於ける同じ *win* もて創造され、其際受身機能は可能のから歸結される。

加之興味あるのは、話が受身相可能機能起源説明になるや否や、恰も動詞 *win* *win* と共に此相形成に關與する様な動詞 *win* 「在る」は何處かへ紛失して、凡ての思索的運用の中心には其々の意義で採られた一動詞 *win* *win* のみが見える事である。

上に間近に制定された受身・可能相形態の信頼出来る標識が我々の自由にならないなら、是は凡て調査が全く困難

なのであらう。此相形成に於ては、其可能機能起源説明に際して運用される動詞「得る」も、動詞「能ふ」も  
關與しない事を我々は知る故に、可能機能は、動詞「得る」(arru, eru) からも動詞「能ふ」(arru, eru) からも  
直接に、受身機能を通じて動詞「得る」(arru, eru) から間接に歸結してはならない事は明かである。

かくて、全問題は、受身相接尾辭 -ari- (又は其複合接尾辭 -arru-, -aru-) が、其語幹受身  
機能を除いて、可能機能を遂行するのは如何にして起るかと云ふ事に歸するのであつて、又は換言すれば、  
如何なる條件に際して其は可能意義を有するのであるか。

以上に於て我々は、或動詞は其等が與へられた文法連結に依從して、他動及び自動意義を  
有すると云ふ事、二重意義を有するに適當な動詞は直接補語現存に際しては他動であり、補語缺乏又は間接補  
語現存に際しては自動である事を確信する可能性を有した。

同上現象は所與の場合にも起ると云ふ事、特に受身又は受身・可能動詞は文法連結の限定類型に際して  
は受身意義をそして文法連結の其々の類型に際しては可能意義を有すると云ふ事は、考へ得  
られる。「文脈に於ける何かは、是等意義中の如何なるものが(即ち、受身又は可能の、N. M.) 此形  
に於ける動詞を與へなければならぬかを屢々明示する」と Brown が言ふのは譯があるのである(私案間隔、N. M.)。  
此故に、如何にして受身相接尾辭 -ari-, -arru-, -aru- は可能機能を遂行するかと云ふ問題に回答を  
與へるが爲には、文法連結の如何なる類型が其々の場合に存するかを吟味する必要がある。生憎にも、類  
似の場合に於て必要である完全さを以ては、是を爲すには場所が許さないで、細目に涉らずに、單に最も一般的境

界に於て問題を解かねばならない。

日本文法に従へば、受身動詞によつて標記される行爲客體は、有情實體とそして特に關係ある人々、又はより眞實には、此行爲完成を其等の上で受ける者、又は擬人化に適當な對象のみがあり得る。行爲客體が非情對象である場合にこそ、受身構成は既に歐羅巴風なのである。(4)

文語に於ては受身行爲の客體は、後置詞缺乏によつて標記される主語形式を採用するが、行爲實行者は、例へば、*sjo:ni xaci ni ka(x)o no sasaru*「小兒蜂に顔を整さる」の如く、後置詞 *ni, jori, kara* によつて標記される直接補語形式を採用する。

一見前掲例證では受身行爲の二客體、*sjo:ni*、小兒、及び *ka(x)o*、顔、一は主語形式、*sjo:ni* で表現され、他は直接補語形式、*ka(x)o* で表記される、が存する様に思はれる。併し、分解すると、次の様になるのである。

- (一) *ka(x)o*、顔、は受身相自身のでなく、其が形成される 能動語幹の、即ち

*xaci...ka(x)o no sas...n =*

*xaci ka(x)o no sasu*

なる能動構成と同一關係により表現される *sas-* の直接 [*neposredstvennyj, ili priamoj*] 客體なのである。

(二) *sjo:ni*、小兒、は其顔、*ka(x)o* の上で派生され、受身相接尾辭 *-ni* を其へ補足して指示される此語幹 *sas-* で標記される行爲完成の 受領客體である。

(三) 其から *sjo:ni* 小兒、が受ける行爲 *sas* の原因、又は派生者は *xaci* 蜂、であると云ふ事は、*xaci* なる語の後で 附隨 [kōhitativory] 後置詞 *ni* 「に」[s] によつて標記される。

かくて、*sjo:ni* が行爲派生者 *xaci* からの *-ur* の受領客體である事は

*sjo:ni*.....*ni*.....*-ur*

なる關係によつて表現されるのである。

附隨 後置詞 *ni* 「に」の 用具 [instrumēntal'naja] 機能 (英語 *with*、獨語 *mit*、佛語

*avec*) は受身行爲 客體 と此行爲 派生者 との間の關係に就ての正確な表示を得るを許容しない。かくて、我々に採られた例證は逐語的には「小兒は蜂を以て顔を螫された」と翻譯されるのであつて、此解釋に於ては、例へば *he was wounded with a knife*——彼は小刀で傷けられた、なる英語句より不可解でないのである。

同じ例證を幾分變へた體裁、*sjo:ni xaci ni sasuru*——小兒蜂に螫さる、に於て、即ち、其が 何處へ螫されるかの指示無しに取らう。動詞語幹 *sar* によつて標記される行爲の直接客體、*ka(a)* が缺乏するが故に、能動構成と同一なる次の關係

*xaci*.....*sas*.....*n*

*xaci* *sasu*

——「蜂螫す」

が我々に残るのであつて、第一例證に於けると同じ關係 *sjo:ni*.....*ni*.....*-ur*.....なのである。

若し *sjo:ni* 小兒、が語幹 *sa-* の直接客體であつて、此行爲 *sa-* からの *-ni* 受領者でないとする  
と、我々は

*sjo:ni* *xaci ni sasaru* なる構成の代りに

*xaci ni sjo:ni wo sasaru* なる構成

を有しなければなるまいが、此後者構成は、受身でなく、可能意義を有してゐて、「蜂は小兒を螫し得る」を標記するのである。

我々が其を分解しようと試るならば、次の様なものを發見しよう。

(一) 能動構成と同一關係

*xaci*.....*sjo:ni wo sas*.....*n* =

*xaci sjo:ni wo sasu*

——「蜂小兒を螫す」

.....*ni*.....*-ni*.....

(二)

即ち用具機能に於ける附隨後置詞 *ni* と受身接尾辭 *-ni* であるが、語幹 *sa-* で表現された行爲完成からの受領客體は存しないのである。

若し今

我々が

*sjo:ni xaci ni sasaru* と

*xaci ni sjo:ni vo sasaru* を比較すると、

行爲語幹 *sas-* からの *-ar-* 受領客體、即ち、*sjo:ni*、小兒、は可能構成に際しては語幹 *sas-* の直接 [nepostdstevennyj (priamo)] 行爲客體であり、其は後置詞とと共に直接補語形式を採用する事によつて表現される此行爲からの受領者でないこと云ふ事が解る。「蜂は小兒を螫し得る」と同じ思想は、次の姿、

*sjo:ni va xaci ni sasaru*

で、即ち、受身構成

*sjo:ni xaci ni sasaru*

から、*sjo:ni*、即ち、受身構成に際する受身行爲客體の後の後置詞 *va* の現存のみによつて區別される構成で表現されるのである。

後置詞 *va* は、文の孤立部を標記する主題又は孤立助詞であるが故に、其儼存の爲に變へられ、た受身構成が如何にして可能意義を獲るかと云ふ事は明瞭なのである。*sjo:ni* の後の *va* は文の全殘餘部から *sjo:ni* を孤立させてゐて、此爲に其等は形式的には *sjo:ni* とは連結してゐなから、*sjo:ni va xaci ni sasaru* なる文は、(一) *sjo:ni va* (二) *xaci ni sasaru* なる二獨立部に分裂する。

今第二獨立部

*xaci ni sasaru*

を検討すると、其中に我々は

(一) 能動構成と同一關係

*raci...sas...n*

*raci sasu*

——「蜂螫す」

(二) .....*ni*.....*-ar*.....

即ち、附隨後置詞 *ni* 及び受身接尾辭 *-ar* を見出すのであるが、行爲完成 *sasu* からの受領客體は我々は解らないのである。

動詞語幹に於ける既名行爲完成からの受領客體の此缺乏に受身と可能構成の基本區別が存しするのである。

併し、其によつて可能構成が受身から區別される或他境界も存するのであつて、例へば可能構成に際して派生行爲を標記する語は、例へば、*vare mo kono mondai ni wa koida(x)eruru*——我も此問題には答へらる、の様に、自身の後に、後置詞 *ni* と並んで、後置詞 *su, mo* 等をも有し得る。

此外に例へば、*midzu asakereba jo:i ni vataruru*——水淺ければ、容易に渡らる、の様に可能構成に際して客體のみならず、受身機能に際して主體が受ける行爲派生物も缺乏する場合がある。*midzu asakereba* は附屬文なるが故に、吟味の餘地は主要文 *jo:i ni vataruru* のみに存する。其には、我々が解る様に、行爲 *vatar-*

からの *-ni*、受領客體も、行爲 *suru* の派生者自身も無いのである。

元來、受身構成から可能構成が區別される凡ては、動詞語幹に於ける既名行爲からの受領客體の缺乏事實自身によつて生れる。

何よりも先づ、受身客體は無い故に、其と受身構成に際して其が受ける行爲自身との間には、受身接尾辭 *-ni* によつて關係が表現される様な特殊關係も無いのである。此故に、此關係を又は客體の受身を表現するのに役立つ受身接尾辭 *-ni* は既に此關係を表現しないと云ふ事は明瞭なのである。

更に、受身客體缺乏の結果として、其と其が受身構成に際して受ける行爲派生者との間には用具機能遂行する後置詞 *ni, kara, jori* によつて關係が標記される様な、特殊關係も無いのである。此故に行爲派生者は受領を惹起する用具でないといふ事實は、用具意義の後置詞を此意義を有しない後置詞で代用して多くの場合に客體表現を得る。

かくて、受身相の受身及び可能機能間の差別は、<sup>(4)</sup> 相接尾辭 *-ni, -aru, -arer-* によつて擴張された動詞が與へられる文法連結の類型差別に於ける全く客體表現を見出すと云ふ事が我々は解る。

従つて、受身相接尾辭可能機能説明に對しては、日本語歐文法が普通爲す様に、動詞 *uru, eru* を惹付け、此機能形成に於ける其推測される役割を各種の思索的解釋もて考究する如何なる必要も無いのである。<sup>(4)</sup>

就中、最新日本文法の一著者なる安田〔Asuda〕が我々と丁度同じ歸結へ來てゐるのを記さない譯には行かない。彼は受身及び可能機能間の差別は、單なる意味差別でなく、文と句の組織に於ける文法差別に存すると斷言し

てゐるのである。(註)

- 註
- 1 Op. cit., p. XIV. 【以上九五頁】
  - 2 Op. cit., p. XIV.
  - 3 Op. cit., p. XIV.
  - 4 Op. cit., p. XV.
  - 5 Op. cit., p. XV.
  - 6 Op. cit., p. XVI. 【以上九六頁】
  - 7 Op. cit., p. XII-XIII.
  - 8 Op. cit., p. XIII.
  - 9 W. G. Aston, *A Grammar of the Japanese Written Language*, p. 80 【實は p. 50. 再版本 p. 99】。 【以上九七頁】
  - 10 同上, p. 99-100 【再版本 p. 109】。
  - 11 同上, p. 99 註釋に 【再版本 p. 109】。
  - 12 同上, p. 83.
  - 13 同上, p. 85.
  - 14 B. H. Chamberlain, *A Simplified Grammar of the Japanese Language*, p. 74 【增訂本 p. 86】。
  - 15 同上, p. 75 【增訂本 p. 78】。 【以上九八頁】
  - 16 同上, p. 76 【增訂本 p. 88】。
  - 17 B. H. Chamberlain, *A Handbook of Colloquial Japanese*, p. 199.

- 18 同上' p. 198.
- 19 同上' p. 201.
- 20 Op. cit., p. 97.
- 21 同上' p. 98. 【以上九九頁】
- 22 Op. cit., p. 141.
- 23 同上' p. 121.
- 24 Op. cit., p. 160.
- 25 同上' p. 160-161. 【以上一〇〇頁】
- 26 同上' p. 161-162.
- 27 同上' p. 162.
- 28 R. Lange. Lehrbuch der Japanischen Umgangssprache, zweite vermehrte und verbesserte Auflage. Formenlehre und die wichtigsten Regeln der Syntax, p. 282-283. Berlin. 1906 【英譯本 p. 266-7. 此邊獨語原本と前後する。註29參照】。
- 29 Ibid., p. 290-291 【英譯本 p. 259】。
- 30 H. Platt. Japanese Conversation-Grammar with numerous reading lessons and dialogues (Method Gaspary-Otto-Sauer) p. 220. London-Hidelberg. 1905 【獨語原本 p. 217' 佛語版 p. 226' 露譯本 p. 262-3】。

英語版のみが露語版よりも正確に H. Platt の命題の方式化を翻譯してゐるとする。Platt に於ては第一種 (B. Chann-betlam による第二及び第三口語活用) 動詞は、現在時語尾 *-mas* (英語版上記七頁、亦一一頁も參照) の外に、現在引用句から解る如く、語尾 *-to* をも有する事が分る。生憎にも、獨語原本缺乏の爲、此事情は私には不明である【第一編第二章註20參照。關係必要箇所を左に抄出する。獨語原本は露文字使用。

Das Passivum wird gebildet durch Anfügung der Endung *areru* bei den Verben der Klasse I. an die um den Anlaut *u* verkürzte Präsensform, bei den Verben der Klasse II. an den einfachen Stamm (Konsonantstamm).

The Passive Voice is formed by adding the termination *aru* to the Present tense of the verbs of Class I after eliminating the termination *u*, and to the simple stem (consonant stem) of the verbs of Class II.

On forme la voix passive en ajoutant la terminaison *areru* au présent des verbes de la 1<sup>re</sup> classe après en avoir éliminé la voyelle finale *u*, et au radical simple (radical consomme) des verbes de la 2<sup>e</sup> classe.

Stradatelnyj zalog obrazujut pribavleniem okančanija *areru* k nastojaščemu vremeni glagolom I klassa, vypustiv predvaritel'no konečnuju *u*, a vo II klasse pribavleniem otogo že okančanija k prostomu kornju (t. e. k kornju na soglasnuju).

獨露共日本語例は羅馬字。】 【ㄉㄨㄟㄟㄟㄟ】

- 31 Ibid., p. 221 【獨 p. 217<sup>\*</sup> 佛 p. 227<sup>\*</sup> 露 p. 263】
- 32 Ibid., p. 223 【獨 p. 219<sup>\*</sup> 佛 p. 228<sup>9\*</sup> 露 p. 265】
- 33 Ibid., p. 224 【獨 p. 220<sup>\*</sup> 佛 p. 229<sup>\*</sup> 露 p. 266】
- 34 Op. cit., p. 88.
- 35 Op. cit., p. 150. 【ㄉㄨㄟㄟㄟㄟ】
- 36 Op. cit., p. 152.
- 37 Op. cit., p. 152.
- 38 Op. cit., str. 118-119.

- 39 Op. cit., str. 102-103.
- 40 同上, str. 102-103. 【以上一〇三頁】
- 41 同上, str. 104-105.
- 42 Op. cit., str. 159-160. 【以上一〇四頁】
- 43 Op. cit., str. 117. 【以上一一三頁】
- 44 三矢、前掲書、一四三頁【增訂本一七三頁】。——松下、前掲書、三五三—三五四頁。【以上一一五頁】
- 45 受身及び可能相は全然差別關係を表現する故に、「受身・可能相」なる術語は文法變格であると同認めなければならぬ。其用法は、其々の相が同一接尾辭「*sh*」の助力により形成される事によつてのみ釋明される。
- 46 就中、可能機能の説明に際して動詞 *miru, shin* をのみ思索する「在得る」説觀點からは、例えば、*makaru*、負かる、の様に、其起源によれば受身接尾辭「*sh*」の助力により形成された古風受身動詞である第一活用の或動詞の可能機能は全然不可解なのである。
- 47 安田喜代門・國語法概説・東京發行所中興館・昭和三年【以上原著通、以下露文字寫音及露譯省略、同年初版、頁付は原著に無いが、二三五頁である】。【以上一一八頁】